MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース

新着収蔵資料紹介
押絵

押絵は、材料が布地のため虫に喰われたり湿気に浸される場合が多くあります。そのため、写真の押絵のように状態が良い資料は、大変貴重です。

写真の押絵は、明治時代に増田町（現・横手市）で呉服屋を営んでいた寄贈者の先祖が作成したものです。布は、京都から購入したものです。（右資料 縦 51.0 ㎝、横 30.5 ㎝）

CONTENTS

01　表紙・目次
02　展示報告「武藤鉄城　秋田の考古と民俗」
03　学芸ノート（地質部門）
04　学芸ノート（生物部門）
05　展示報告「秋田の縄文遺産」
06　学芸ノート（工芸部門）
07　学芸ノート（民俗部門）
08　令和５年度展示スケジュール

NO.176

展示報告　令和４年９月24日（土）～11月27日（日）

秋田の先覚記念室　企画コーナー展

武藤 鉄城 ～秋田の考古と民俗～

今年度の秋田の先覚記念室・企画コーナー展では、秋田の考古学や民俗学、郷土史研究の草分けとして幅広く活躍した武藤鉄城についての展示を開催しました。

武藤鉄城は、秋田市で生まれ、後に仙北郡角館町（現・仙北市角館町）を拠点に活動した研究者です。県内唯一の国宝である「線刻千手観音等鏡像」（大仙市・水神社の御神体）の精巧な模写を作成してこれを世に知らしめ、国宝指定のきっかけをつくりました。また、令和３年に世界文化遺産となった大湯環状列石を始め、多くの組石の発掘にも携わった人物として知られています。

武藤鉄城（1896～1956）

本展では、鉄城の生涯と功績について、鉄城の旧蔵品およそ130点の展示と解説パネルでご紹介しました。鉄城が遺した700以上の論考のもととなった、調査の記録が事細かに書かれたノートや、関連する新聞記事等を収集したスクラップブックなど、鉄城の研究に対する緻密な姿勢が垣間見える資料を中心に展示しました。好奇心旺盛だった鉄城の研究対象は非常に多岐にわたっており、学生時代から慣れ親しみ、角館に移るきっかけにもなったスキーをはじめとするスポーツに関する資料や、角館の歴史や風習に関する資料など、多彩な資料をご覧いただきました。

また、展示に関連した付帯事業として、10月30日（日）に秋田県埋蔵文化財センター元所長の小林克氏と、仙北市立角館樺細工伝承館元館長の中田達男氏を講師にお招きし、「鉄城の考古と民俗」と題してご講演いただきました。鉄城の生涯や研究成果、人となりについて、多くの資料や写真を交えながらお話しいただき、制約の多い時期にもかかわらず、県内外からお越しいただいた30名を超える参加者から、大変好評を博しました。

展示の様子

◆展示構成

1　文筆への傾倒
2　スポーツマン・鉄城
3　考古・歴史研究
4　民俗研究とフィールドワーク
5　戦中から戦後へ

講演会の様子

水神社の鏡観音に関する新聞記事を集めたスクラップブックなど（個人蔵）

（秋田の先覚記念室：千田　育栄）

学芸ノート

化石資料の収集と保存

男鹿半島安田海岸の鮪川層～潟西層産の貝類化石

写真１　安田海岸の地層（部分）

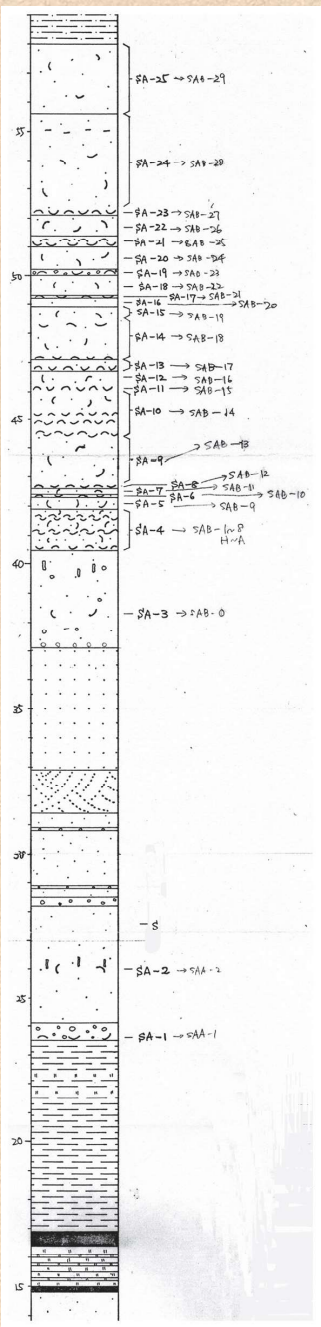

写真２
鮪川層の採集層準（部分）
柱状図の左の数字は層の厚さ（m）

博物館の役割として皆さんが思い浮かべるのは、展示室での常設展や企画展などでしょうか。実は、それと並んで重要なのが資料の収集と保存、そして資料に関する研究です。ここでは、地質部門で収蔵している化石を例に、資料の収集とその整理・保管について紹介します。

化石資料にとって大切なのは、それがどこで採れたかです。採集地点の地図上の場所だけでなく、どの地層から採集されたのか、さらにはその地層のどの部分から採集されたのかまで分かると、その後の研究にたいへん役に立ちます。

さて、当館は昭和50年に開館しましたが、男鹿半島に近く、開館前から男鹿半島産の化石を収集してきました。特に安田海岸は海に削られてできた崖が延々と続き、そこにはおよそ50万年～8万年前にかけてできた地層が露出しています（写真１）。なかでも鮪川層や潟西層と呼ばれる地層には貝化石を多量に含む部分が何層もあります。

現在当館の地質ボランティアとして活動している渡部晟氏は、当館職員として博物館の活動に携わってきた貝類化石の研究者です。氏は開館当時から安田海岸産の化石について、地層の部分（層準）ごとに採集し（写真２）、クリーニング（化石の砂や泥を落として観察できるように整える作業）し、同定（名前を決める）作業を続けてきました。例えば鮪川層では31の層準からそれぞれ貝化石を選り分け、巻き貝46種、二枚貝71種について名前を決める、たいへん根気のいる仕事です。その結果、博物館資料としてまとまった形で登録できるようになったのが平成20年、22年、及び29年で、現在も継続中です。登録された資料には分類番号や学名、産地などを記入したラベルを作り、産出層準ごとにまとめてケースに入れて、収蔵庫で保管しています（写真３，４）。

きちんと同定された化石が産出層準ごとに保管されることにより、この地域の貝類について、その変遷をはじめ、堆積環境、当時の気候や海流まで調べることができるのです。このように、博物館の仕事は展示だけではなく、資料の収集と保存、そして資料に関する研究が重要なのです。

（地質部門：渡部　均）

写真３　化石保管ケース

写真４
微小貝はこのように袋に
入れてケースに保管

学芸ノート

自然展示室展示替えコーナー「これなに？葉っぱについた丸い“こぶ”」

自然展示室の展示替えコーナーでは、令和４年10月15日より「これなに？葉っぱについた丸い“こぶ”」と題し、様々な形の「虫こぶ」を展示しています。「虫こぶ」とは、虫こぶをつくる小さな昆虫が植物の細胞分裂の盛んな葉や新芽等を刺激することで、植物が成長異常を引き起こして作られた構造です。この中で幼虫は成長していくので、昆虫たちにとっては隠れ家と言えるでしょう。展示では、春から秋までに見られた虫こぶを、断面写真と、乾燥標本で紹介しています。

虫こぶにはそれぞれ名前がついていますが、野山でそれらしいものを見つけても、虫こぶの名前どころか、虫こぶかどうかも分からないことがあります。こぶしの果実などは、一見虫こぶと見間違えてしまう人もいるのではないでしょうか。見つけた時に採集して、後で中を割りじっくり観察できれば良いのですが、自然環境の保全から採集が禁止されている場所もあります。虫こぶ探しをする際は、発見した虫こぶの名前は後で調べられるように、虫こぶ部分のアップ画像だけではなく、植物も特定できるような写真と、植物のどの部位に形成されたのかがわかるような写真も撮っておくと、同定の参考になります。虫こぶ形成昆虫と寄主植物には特異的な関係があるため、目的の虫こぶがある時は、寄主植物を頼りに探します。ヌルデの葉につくヌルデミミフシは夏の早い時期に探しても目につきませんが、晩夏から秋にかけて大きく成長した様には感動します。通年で特定の植物を観察すると、その植物の成長や徐々に成長していく虫こぶの変化、昆虫のさまざまな発育段階を観察することができて、驚きと発見があります。

虫こぶはアルコールによる保存が一般的ですが、今回は大きさや植物のどの部位に虫こぶが形成されたのかがわかるように、採集した虫こぶは植物体に付いたままの乾燥標本を作成しました。標本づくりの途中で幼虫や羽化個体が飛び出すことがないよう、虫こぶの断面を観察するサンプル以外は採集後冷凍庫で急冷処理を施した後、虫こぶの形状はそのままに、それ以外の部分を慎重に押し葉にして台紙に貼り付けました。ヒメアオキを乾燥させると、常緑の青々とした葉も正常な果実も、虫こぶ化した果実も区別がつかないほどに黒く変色してしまうため、アオキミフクレフシは写真のみで紹介しています。

「今まで木の実だと思っていたのに虫こぶだったとは、ショック」、「気持ち悪いけど、面白い」と、お客様の反応はそれぞれですが、小さな感動を感じていただけたら幸いです。

「これなに？葉っぱについた丸い“こぶ”」は現在展示中です。あなたが見つけたその果実、「虫こぶ」かもしれませんよ！

（生物部門：藤中　由美）

アオキミフクレフシ

ササウオフシ

ノブドウミフクレフシ

〔展示資料〕
ケヤキハフクロフシ、ナラメリンゴフシ、アオキミフクレフシ、クリメコブズイフシ、シナノキハツノフシ、エゴノネコアシ、ヌルデミミフシ、ノブドウミフクレフシ、ウダイカンバムレトサカフシ、ササウオフシ、マタタビミフクレフシ、マンサクメイボフシ

令和４年９月24日（土）～11月６日（日）

人面付環状注口土器とＸ線ＣＴ解析の動画による紹介

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録を機に、県内に所在する国・県指定縄文時代遺物を中心に紹介しました。

各地で大事に継承・保管されてきた縄文の逸品の数々は、一堂に会することでさらに輝きを増したようです。「地元にこんなに素晴らしい資料があるのを知らなかった」「いっぺんに見ることができて良かった」といった声が寄せられました。

展示冒頭では当館蔵の人面付環状注口土器とともに、秋田県産業技術センターの協力を得て行ったＸ線ＣＴ解析の成果を紹介し、近年発展の目覚ましいデジタル技術の活用について知っていただく機会ともなりました。

開催にあたり、資料の調査・借用にご協力いただきました全ての皆様に、心より御礼申し上げます。

（考古部門：加藤　竜）

人気を集めた土偶の逸品

展示構成と主な展示資料

序章　秋田の縄文遺産　人面付環状注口土器、官暇余録、養虫仙人画記行　ほか
１章　石に込めた祈り　大形磨製石斧、山館上ノ山遺跡・八幡平字根瀬出土鋒形石器
コラム　磨製石斧をつくる　臼館跡出土品
２章　漆工の精華　戸平川遺跡出土品、中山遺跡出土漆工及び漆工関係出土品
３章　海と川の恵み　魚形文刻石（拓本）、柏子所貝塚出土骨角製品および貝製品
コラム　日本海側最古の貝塚　菖蒲崎貝塚出土品
４章　土器の名品　沢田遺跡出土鉢形土器、根子ノ沢遺跡出土土器
５章　マツリの名残　大湯環状列石・伊勢堂岱遺跡・白坂遺跡・麻生遺跡出土品
６章　縄文の容貌　地方遺跡・戸平川遺跡出土土面、黒倉Ｉ遺跡・中杉沢Ａ遺跡・坂の上Ｆ遺跡・東福寺村上・塚ノ下遺跡・大曲館ノ下・虫内Ｉ遺跡・星宮遺跡・鎧田遺跡出土土偶
コラム　縄文人と動物たち　漆下遺跡出土クマ形土製品　ほか

学芸ノート

亀田ぜんまい織

素朴な色合いと毛織物のような風合いが魅力のぜんまい織は旧岩城町亀田（現由利本荘市）の特産品です。保温性防水性に優れているため、雨合羽として重宝されました。

ぜんまいは、山間の急傾斜に多いシダ植物で渦巻状の幼葉がワタ状の繊維で覆われているのが大きな特徴です。茶褐色の柔らかい繊維はみるからに温かそうで、寒さから身を守るため、ぜんまい綿で糸を作って布を織ろうと考えるのは、ごく自然な発想だったのでしょう。ぜんまいは、女ぜんまい（栄養葉）と男ぜんまい（胞子葉）が一つの株から一緒に芽吹きます（図１）。それぞれ栄養を作る働きと、繁殖のために胞子を飛ばす役割をもっています。食用としても布の材料としても、主に採集されるのは女ぜんまいの方の若芽です。この若芽から丁寧に綿を摘み取ってゴミを取り、乾燥させてぜんまい綿を作ります（図２）。

ぜんまい綿の繊維は短毛で絡みにくいため、そのままでは糸として紡ぐことはできません。真綿もしくは木綿を土台として紡ぎ、所々にぜんまい綿を撚りつけるようにして糸にしていきます（図３）。ぜんまい綿が混紡された糸は切れやすいため、張力のかからない緯糸として機織にかけられました（図４）。

ぜんまい織の起源については詳しいことはわかっていません。江戸時代までは山間部の地域において自家用としてつくられてきたと考えられています。ぜんまい織が記録に登場するのは、旧岩城町亀田で糸の機械紡績が工夫され、機械織機を用いた生産が行われるようになった明治20年頃からです。明治30年頃には製品として盛んに売り出されるようになり、白鳥の羽綿を使ったぜんまい白鳥織も登場しました。機械織機による織物の生産数は、明治37年に年約4000反、大正期には年20000反にまで増加しました。生産数増加のひとつの要因として、ぜんまい織が明治36年に大阪で開催された第５回内国勧業博覧会において褒賞を受賞したことが挙げられます。内国勧業博覧会とは、国内の産業発展と外国への輸出促進を目的として、明治政府が主導で行った博覧会のことです。博覧会での受賞により、全国に亀田のぜんまい織の名が知られるようになりました。一反の価格は、大正10年で３～５円と相当に高かったのにも関わらず生産は軌道に乗り、秋田県林務課の記録「昭和５年度特殊事項調査書類」（秋田県公文書館蔵）によると、一時は販路が樺太から台湾にまで及びました。ですが、注文は大口のものがなく２、３反程度の小口注文のみであったこと、販路の開拓があまり進まなかったことなどから徐々に生産数を下げ、昭和６年には機械工業による生産の幕を閉じました。その後、何度か復興の兆しがあったものの、ぜんまい織が町の産業となることはありませんでした。

こうして一度は技術が消滅してしまったぜんまい織ですが、現在では地元に縁のある女性４名の天鷺ぜんまい織製作グループが週に２回集まり、ぜんまい織と白鳥織の技術を再現しようと奮闘しています（図５）。機械織機による製作ではなく、自家用として作られていた頃を再現し、すべてが手作業です。そのため糸紡ぎから、整経、機がけ、機織りと長い工程を経て、1反を織るのは１年かかるといいます（図６）。今回、ぜんまい綿の糸紡ぎを体験させていただきました。筆者は綿とカラムシを紡ぐ博物館教室を開催しており、一般的な糸車であれば回して糸を紡ぐことはできます。しかし、ぜんまい糸を紡ぐのに使用するのは足踏み式の糸車です。左手に真綿を引きながら右手でぜんまい綿を少しずつ撚りつけ、足で踏み板を踏むというのは至難の業でした。今後ぜんまい織の技術を更に深く理解するために、まずは糸紡ぎの練習を始めたいと考えています。ぜんまい綿が入手できる春の山菜シーズンが楽しみです。

（工芸部門：斉藤　洋子）

図１
左：男ぜんまい
右：女ぜんまい

図２　ぜんまい綿

図３　ぜんまい綿を真綿に撚りつける様子

図４　ぜんまい糸を緯糸にして織る

図５　史跡保存伝承の里「天鷺村」の一室で作業をする、製作グループの女性達

図６　ぜんまい白鳥織
（天鷺ぜんまい織製作グループ
青木清子氏製作）

学芸ノート

八橋人形のルーツをさぐる

－髙松家所蔵の八橋人形型から－

❖八橋人形

八橋人形は秋田市八橋地区で作られていた土人形です。八橋界わいでは、男の子が生まれると天神人形を、女の子が生まれると雛人形を買い与える習慣がありました。しかしながら八橋人形の発祥には不明な点が多く、文献資料も多くは残されていません。もともとは鍋子山（現在の市立秋田総合病院そば）の窯で行われた人形制作がはじまりといわれています。何度か中絶した後、文政・天保期に八橋の和助、金山良寛、吉右衛門なる人物が、八橋の毘沙門社近くで土人形を販売したことが、八橋人形につながるとされています。当時は「毘沙門人形」と呼ばれていましたが、明治時代になると「八橋人形」と呼ばれるようになったとのことです。

大正時代には10数人の制作者がいましたが、昭和の半ばには、髙松・遠藤・道川家の３軒のみになり、平成26年、道川トモさんが亡くなられて以来、直系の継承者はいなくなってしまいました。現在は、「八橋人形伝承の会」が道川家の人形型を受けついで、人形制作を行っています。

❖髙松家の八橋人形型

髙松家では、平成元年に髙松茂子さんが亡くなられて以来、人形制作は途絶しています。しかしながら、人形型は同家で保管されており、今回茂子氏の御子息である忠充氏の御厚意によって、人形型を見せていただくことができました。

髙松家で人形制作をはじめたのは、茂子氏で４代目になります。髙松家には古い人形型が残されており、昭和33年の秋田魁新報の記事では「新しい型は一切使っていない正統派が、この高松さん一家」と紹介されています。

今回、髙松家で307件の人形型が確認できました。天神人形や雛人形が数多く残されており、その他七福神などの縁起物の人形型も見られました。型の中には作者名や年代などが書かれたものがあり、作者が分かる人形型から、今回は「金山」家に関係する人形型について紹介したいと思います。

❖金山家の人形型

金山家は、文政期頃に「毘沙門人形」なる、八橋人形のもとになった人形を販売していた家です。金山良寛・良團なる人物の名が文献から確認できます。金山家の人形型が髙松家で保管されていることは、『秋田県史　民俗工芸編』に報告されており、今回22件の金山家の人形型が確認できました。

いずれも土型で、型の表面には、年号はないものの、「金山」「可奈や万」「亟」などの印が刻まれています。大きな型でも内径の幅が20cm程度、高さが25cm程度で、ほとんどの型は幅14～15cm、高さ20cm前後です。金山印のついている人形型には、天神や男雛と思われるものや、狛犬、高砂などがありました。髙松家の高砂は鶴亀を持っていますが、金山家の型では箒と熊手を持っているようでした。また、女性像や、猫、鳩などの型もありました。八橋人形というと天神や雛人形をまず思い浮かべますが、犬や猫、鳩といった動物も人気があり、金山家でも作られていたことが分かりました。

八橋人形についてはまだまだ分からないことがたくさんありますが、今後、人形型と現在残されている人形とを照らしあわせていきながら、八橋人形の源流を少しでも辿れたらと思っています。

（民俗部門：丸谷　仁美）

金山家の人形型
高砂扇

鳩

令和５年度
展示スケジュール

企画展
秋田藩の絵図
―描かれた城と城下町―

4月29日（土祝）～ 6月11日（日）

江戸時代の秋田藩には、居城である久保田に加えて横手と大館にも城がありました。これら三つの城下町を描いた城絵図を一堂に集めて展示し、城下町の特色やその変遷を探ります。この他にも様々な関係資料を紹介します。

特別展
人形博覧会
―土偶からリカちゃんまで―

7月1日（土）～ 8月27日（日）

縄文時代や古代の人形は子孫繁栄を祈りけがれを払う祈りの道具でしたが、時代とともに愛玩し鑑賞するための人形が発展し、今日も人形は生活や趣味の中で大きな位置を占めています。新旧の人形を取り上げ、人形に対する人々の思い、風習、時代背景等を紹介します。

企画展
HOTTA
―『払田柵跡』発掘半世紀―

9月23日（土祝）～ 11月5日（日）

古代の秋田に建設された巨大な城柵・払田柵は謎の多い遺跡ですが、長年の発掘により次第にその姿が明らかとなってきました。半世紀にわたる払田柵調査の成果を紹介します。

企画展
大こうぶつ展
―鉱物を楽しむ５つのメニュー―

11月23日（土祝）～ 令和6年4月7日（日）

秋田の鉱山から産出した金属鉱物をはじめ、世界各地の鉱物の美しい結晶を多数展示します。また、鉱物のさまざまな形や色、貴金属やレアメタル、宝石など、魅力溢れる鉱物の世界を、趣向をこらしたメニューで紹介します。

コーナー展

菅江真澄資料センター（1F）

❶ 真澄採録怪異譚
―ささきゑびす氏の絵画とともに―
7月15日(土）～9月18日(月祝)

❷《雪の出羽路雄勝郡》と《勝地臨毫雄勝郡》
11月25日(土）～ 令和６年1月21日(日)

❸ 真澄が記録した鹿角･小坂
令和６年3月23日(土）～ 5月12日(日)

ふるさとまつり広場（2F）

❶ 子どもの成長を願う―天神人形―
4月20日(木）～ 6月20日(火)

❷ 夏のまつり―七夕絵どうろう―
7月6日(木）～ 8月29日(火)

❸ 災いを防ぐ―ショウキサマ―
9月28日(木）～ 11月14日(火)

❹ 正月の来訪神―ナマハゲ―
12月7日(木）～ 令和６年2月6日(火)

❺ 春の訪れ―ひな人形･ 押絵―
令和６年2月22日(木）～ 4月2日(火)

秋田の先覚記念室（2F）

生誕120年記念　勝平得之―得之･ 秋田への想い―
9月24日(日）～11月26日(日)

より快適にホームページをご利用いただくため、2023年2月1日からホームページを全面リニューアルしました。是非ご活用ください。

秋田県立博物館ニュース No.176　2023.3.16 発行
編集・発行　秋田県立博物館

秋田県立博物館
〒010-0124　秋田県秋田市金足鳥崎字後山 52
TEL：018-873-4121　/　FAX：018-873-4123
E-mail：info@akihaku.jp　URL：https://www.akihaku.jp/